

近代フランスにおける「女らしさ」の規範と表象

小倉 孝 誠

なぜ女の身体の表象を論じるのか

ジェンダーを論じる際に、身体観はきわめて大きな要素である。一般的な理解によれば、セックスは生物学的な差異で、ジェンダーは文化的な構築物とされる。そのジェンダーが構築されるにあたって身体が重要な前提と見なされ、同時に、ジェンダーが身体的な差異に意味づけをする根拠となる。身体の表象をめぐることは、セックスとジェンダーは相互補完的に作用する。

日常生活において身体は常になまなましい現実として、われわれの意識と心理に影響を及ぼす。抽象的な身体というものはない。身体は一定の時空間のなかに位置づけられ、男であるか女であるか、健康であるか病んでいるか、痩せているか太っているか、老いているか若いかなど、一定の状況にさらされている。

大多数の人々にとって、もっとも決定的な差異は男女の性差であろう。病気は治すことができるし、痩せる太るはコントロールが可能だし、老若は相対的なものにすぎないが、身体の性差は克服しがたい差異である(現在では医学的に性転換手術が可能だが、実際におこなわれることはきわめて稀だ)。男にとって女の身体は(そして女にとって男の身体は)、けっして追体験できない絶対的な他者ということになる。したがって男が女の身体をめぐる(そして女が男の身体をめぐる)紡ぎ出す表象には、さまざまな幻想や神話が織り込まれているにちがいない。しかし、そのような幻想や神話も現実を構成するファクターであり、単なる謬見として無視することはできない。多くの場合、女性たちは、男性たちが創りあげた神話や幻想を「自然」なものとして受け入れるよう、「社会」と「文化」によって長いあいだ馴致させられてきたのである。本稿は近代フランスを対象にして、そのような幻想と神話を社会的テキストとして解析することをめざす。

なぜ、女の身体表象なのか。

それは近代フランスにおいて、男の身体よりも女の身体のほうがかくに頻りに論じられ、描かれ、語られてきたからである。しかも女の身体を語り、描き、論じてきたのはしばしば男であった。たとえば19世紀の男たちにとって、まるで自明であるかのようにみずからの身

体は議論の対象にならなかったが、女の身体は謎めいたものであり、神秘的な客体であった。女の身体は欲望の対象であると同時に怖れの対象であり、魅惑的なものであると同時に危険なものだった。そのような謎や神秘性に魅せられ、両義性に困惑しながら、医者や生理学者は女の身体を分析し、画家は女の姿態と衣裳を描き、作家は女の肉体と情動を語ることを止めなかった。

以下のページにおいては、女の身体をめぐる三つの異なる言説を文化史的な視点から読み解いてみる。すなわち医学の記述、礼儀作法書、小説である。それによってジェンダーの問題を、歴史の文脈のなかであらためて考察してみたい。

医学の言説

身体に関する科学的な言説としてもっとも影響力の大きいのが医学であることに、おそらく異論の余地はないだろう。その医学は長い間、男女の違いに無関心だった。

近代以前には、古代ギリシアの医者ガレノスの思想が強い拘束力を持ち、男女には生物学的に明確な差異が認められていなかったのである。トマス・ラカーの『セックスの発明——性差の観念史と解剖学のアボリア』によれば¹⁾、女性を男性の一変種とみなす「単一生殖」という理論モデルが支配的だったという。解剖学的には、卵巣は「女の睪丸」であり、男の生殖器官を女の体内に組み入れたものにすぎないとされた。月経とそれを引き起こすメカニズムは解明されておらず、閉経という概念は存在しなかった。当時の解剖図を見ると、睪丸と卵巣の位置こそ違うものの、形態としては相同であることが強調される。卵巣は、本来なら外部に露出すべきものが体内にとどまっているだけなのだから、女とは「不完全な男」、男に至るための過渡的な段階ということになる……。

18世紀に入ってはじめて、男女の性差に関する考え方に根元的な変化が起こる。生理学と解剖学の知識が深まるにつれて、男と女が本質的に異なる性であるとする学説が支持をえていく。同時にそこでは、生物学的な性差がことさら強調されることによって、女性のアイデンティティが子宮と卵巣という生殖器官を中心にして構築されるという状況を生み出すことにつながった。荻野美穂が「女性の性器化」²⁾と呼んだこの現象は、19世紀になると、社会と文化における男女の差異を説明するのに利用されるだろう。男女の活動、感情生活、権利、義務が異なるのは恣意的な差別ではなく、自然の摂理によって定められた宿命にほかならないというわけである。セックスがジェンダーの構図を正当化すると考えられた。

『臨床医学の誕生』の著者ミシェル・フーコーに言及するまでもなく、ヨーロッパの19世紀は、医学と医者の発言力が飛躍的に高まった時代である。臨床医学が確立して医学にたいする信頼が増し、市民の身体を管理するための予防医学がしだいに整えられ、衛生学的な配慮が必要だという意識が社会全体に浸透していった。科学の一分野としてだけでなく、社会、

行政、家庭生活などにも関与する知として、医学は影響力を強めたのだった。そのような状況を背景にして、19世紀においては女性をめぐる表象とディスコースの布置を決定づけたのが医学であった。

それをよく示しているのが、たとえば1812年1822年にかけて60巻として刊行された『医学事典 *Dictionnaire des sciences médicales*』である。19世紀初頭における医学知識の集大成たるこの事典の第14巻に、「女性 *Femme*」をめぐる160ページにもわたる長い項目が収められている（ちなみに「男性」という項目はない！）。この項目は「人類学と生理学」、「倫理」、「女性の病気」という三つのセクションに分かれ、ヴィレーという医学者がはじめの二つを執筆している。ヴィレーは「女性とは何か？」と問いかけ、その本質を子宮に見ようとすする。

女性とは何か？それはわれわれ人類の重要な起源にほかならない。胚と卵の受託者であり、その根元的な母胎である。あらゆる女性はおぼろげ繁殖のために創られた。その生殖器は女性の身体構造の根源であり、基盤である。女性にあっては、すべてがこの組織の中核から発し、すべてがそこに帰着する。女性の生の原理は子宮にあり、人体組織のすべてに影響を及ぼす³⁾。

女性の骨格は男性のそれに較べてより細く、細胞繊維はより弛緩している。このように身体的に劣っているのは女性にスペルマがないからであり、その点で女性は去勢された宦官に似ているという。スペルマこそ男性の頑強な肉体を作りだし、勇気と思考力をもたらす。ここでもやはり、女性とは欠落をかかえた男性、男性になる以前の人間という定義をされているのだ。そして生物学的な違いは、当然のこのように男女の性格上の差異を導く。

男は能動的で、女は受動的である。男は体質的に暖かく乾いていたり、あるいは激しかったりするが、女は湿っていて、より冷たい。前者は支配し、勝利を取めるのに対し、後者は従属し、嘆願する⁴⁾。

女性はまた身体的な脆弱さゆえに子供に似ている、と『医学事典』は指摘する。確かに女性は男性よりも早く成熟するが、成長はその分早く止まってしまうので、女性は永遠になかば子供の状態に留まるという。

女性は体格という面で、ほとんど常に子供である。子供と同じように、女性の器官はさまざまな衝動にたいして容易に屈してしまう。女性は感受性が鋭く、まさしくそれゆえに、同一の感覚を長いあいだ持続させることができない⁵⁾。

女性は思考の脈絡よりも感覚的な印象に敏感であり、想像力は興奮しやすい。女性の神経組織は男性のそれよりも容易に、身体のさまざまな部位に感応してしまう。このような差別化のディスクールは、知性や精神の領域にまで及んでいく。こうして『医学事典』という体系化された知の空間において、男は理性で女は感性という構図が創りあげられる。医学という科学、つまり客観性を標榜する学問の名において、男と女の心理的、感覚的差異が説明され、そのことをつうじてジェンダーの非対称性がまことしやかに正当化され、刷り込まれていくのである。

女性は思想を生み出すよりも、むしろさまざまな印象を受容する。細部を把握し、多様な対象のあいだにあるかすかな繋がりや結びつきよりも、その対象のニュアンスを理解する。女性は過去と比較したり、未来を予測したり計算したりするよりも、現在を感じる。男性が一般化しようとするものを、女性は個別化する。女性に具わっているのは、連関した思想の脈絡や理性の緊密な繋がりではなく、むしろ繊細な機転であり、礼儀作法をすばやく洞察する能力である。男性が糾合するものを、女性は分離する。われわれ男性は集団を見るが、女性は分割された部分をよりよく認識できる⁶⁾。

女と病い

19世紀の医学書には、「男性」をことさらに論じた項目はほとんど見当たらない。男性の問題は人間一般の身体や病気の問題として記述されるからである。フランス語としては「男性 homme」と「人間 homme」がいささかの疑問もなく同一視されていた時代だった。

他方で、医学書のなかにはかならず「女性」という項目が設けられている。そしてそこに読まれる記述のなかでは、女性の病いに関するページがきわめて多いのが特徴である。先に触れた『医学事典』には「女性の病気」というセクションが設けられており、著者のフルニエは女性の病気をめぐる哲学的考察や、月経、思春期、妊娠、出産、授乳、閉経などに付随するさまざまな病理的症狀に関する所見を、ほぼ100ページにわたって開陳している。

いや、医学の言説だけではない。他の言説においても、女性をめぐる議論は不可避免的に病いのテーマをたぐり寄せてしまうのだ。たとえば19世紀フランスを代表する歴史家ジュール・ミシュレ(1798-1874)は、『愛』(1858)と題された書物のなかで女性の心理、生理、身体をめぐる特異な思想を展開しているのだが、そこでミシュレは、女性は愛ゆえに病み、絶えず傷ついている人間であると主張する。「女とは何か。それは病気である」。女性の生涯は絶え間ない苦しみの連続であり、女性はその苦しみに耐える術を知っている。そうした苦しみと病いは、とりわけ母性という天から授かった賜物ゆえに引き起こされる。「女は愛されたいと願う。女は愛と母性の器官で悩む。したがって女の病いはすべて、直接的にせよ間接的にせよ子宮の反響なのである」⁷⁾(第四書、第九章)。女性が絶えず病んでいることが自然に

よって定められた摂理であるとすれば、その病いを癒し、慰めてやるのは男性の務めであろう。女が病人であるとすれば、男は医師たるべきである、とミシュレは忠告するのである。

医学事典であれば、女の病気について解説することは理解できる。しかし哲学や歴史の観点から論じられた女性論においても、ことさら病いというテーマが特権化されているとなれば、これは単なる偶然ではないだろう。19世紀の女性をめぐる言説においては、女性はほとんど常に病気であり、女性の生涯はさまざまな身体的異変の連続として把握される。成長や母性にともなう諸症状は、注意深く対処すべき身体の試練にはかならなかった。

束縛される身体

医学書や医学事典は、身体と病理に関する科学的な知に依拠して女性の身体を論じた。それに対して、礼儀作法の言説は宗教と社会道徳の名において身体にさまざまな規範を課そうとする。18世紀末の革命によって政治的、経済的権力を掌握した後、文化的にもそれを正当化しようとしたブルジョワジーは、民衆とみずからの間に一線を画すために、身体文化を洗練させることに強く執着した。動作や身ぶりや会話において細かな規定を課して身体を教化すること、ミシェル・フーコー流に言うならば「従順な身体」を形成すること、それが当時のブルジョワジーが構築した身体文化の基底にあった考えである。子供と大人、男性と女性とを問わず、規範にしたがう訓育された身体が求められていた。身体は生物的な個体であると同時に、階級性を強く刻印された社会的産物でなければならなかった。

そのことはとりわけ女性の身体において著しい。男の身体がおもに学校と軍隊で訓育されたのに対し、若いブルジョワ女性がみずからの身体を統制する術を学んだのは、主として修道院と寄宿舎である。19世紀のブルジョワ女性たちは、思春期の一時期をしばしば修道院で過ごした。最終的に修道女になるためというよりも、上流階級が娘たちに施す教育プログラムの一環だったのである。そして修道院を出て両親の家に戻り、しばらくして両親の決めた相手と結婚するというのがお定まりのライフコースだった。

フランスの歴史家オディール・アルノルドの研究によれば⁹⁾、当時の修道院が女性の身体の教化という点で消しがたい影響を残したことが分かる。修道院では、女性たちの立ち方、座り方、歩き方、話し方など、立ち居振る舞いが細かに規定されていた。額や鼻に皺を寄せてはならない。口をぼかんと開けたり、ぎゅっと締めたりしてはならない。喜怒哀楽の情をあまりにはっきり顔に出すのは品がない。気取った身だしなみ、自然さを欠く動作、不謹慎な身振りなどは避けるべきである、など。

1857年に刊行されたトルッソンの著作によれば、頭部はまっすぐの状態に保ち、上げすぎても下げすぎてもいけない。目をきょろつかせること、大声で笑うこと、片足だけに体重をかけること、饒舌なこと、早足で歩いたり走ったりすることは禁止だった。娘たちはほとん

ど常に直立不動の姿勢を求められ、感情と情動を抑制し、動作と言葉によるコミュニケーションをいわば抑圧されたのである。身体とその表現は、氷のような沈黙を強いられ、禁欲を課されたのだった。

礼儀作法書の戦略

一般市民のあいだに流布していた礼儀作法書でも、同じような傾向が看取される。19世紀前半は、男性の著者が男性読者を念頭において作法書を刊行した例が多い。そこで何より求められているのは社会的、職業的成功であり、その目的に至るための要素として礼儀作法が位置づけられた。それに対して1860年代以降に出版された礼儀作法書は多く女性、しかも上流階級の女性の手になるもので、読者として想定されていたのはおもに女性である。「男は職場に、女は家庭に」というのが19世紀ブルジョワ社会の原理であり、ブルジョワ女性の生活は家庭と社交に関することがらで占められていた。女性のための作法書においては、礼儀作法の体系が社交生活のあらゆる領域をカバーし、女性読者は愛され、気に入られるためにその作法の体系に習熟するよう求められた。そこでもまた、身体には大きな役割が振り当てられるのだ。

礼儀作法書においては、女の身体が男の身体よりもはるかに厳しく監視される。換言すれば、女は男よりもその外面性（身体、動作、表情、衣服）において判断され、価値づけられる傾向が強かった。女のなかでは、とりわけ未婚の女性が強く身体の規制を課された。既婚の女性がモラルや愛情の面でさまざまな規範にさらされたのに対し、娘たちは、より多く身体的な規範を受け入れるよう要請されていた。若いブルジョワ娘にとって、身体の抑制を学び、優雅さを獲得し、自然な態度物腰を身につけることは、来るべき結婚のために役立つ有効な手段と認識されていたのである。

スタッフ男爵夫人の『社交の慣例』（1889）は、その後の礼儀作法書の形式と精神を決定づけた著作であるが⁹⁾、そのなかの「社交生活と対人関係」と題された章にはとりわけ身体技法に関する規定が数多く含まれている。対人関係を円滑にすすめ、みずからについて好印象を抱かせるためには、身体とその表現に配慮しなければならなかった。その際、礼儀作法と美が深く結びついており、社会的な礼節が美的な価値とつながっていることが強調される。いくつか具体例をあげよう。

歩き方は、身体所作の重要な項目である。足早に歩くことは構わないが、優雅に落ちついて歩くべきである。一定した足取りで、踵をあまり鳴らさないのが上品なしぐさである。サロンの中では緩やかに、しなやかに、滑るように歩を運ぶのが望ましい。

握手については、先に手を差しよべるべきは女性であって、男性の方から女性に手を差し出すのは礼儀に背く。女性と握手した時、男性はその手をあまり強く握ったり、長いあいだ

握ったりしてはならない。相手が目上の人の場合は、相手が手を出すのを待つほうがよい。握手というのは信頼を示す身ぶりだから、するときは率直な態度をとるべきで、指先でうわべだけの握手をするのは礼に反する。

動作や身ぶりについては、禁止事項が少なくない。一般に「……してはならない」というのは、礼儀作法書に類出する言い回しである。スタッフ夫人によれば、事あるごとに大仰な身ぶりをするのは下品ということになる。たとえば天を仰いだり、気絶したり、目を回したり、手を合わせて腕を高く上げたりするのは、よほど劇的な状況にでもないかぎり滑稽な行為にすぎない。スタッフ夫人は、感情をあまり直截に表出することにたいして否定的である。それは率直さとして評価されるというより、育ちの悪さとして批判される。

受けた印象がどのようなものであれ、それを抑えるようではなければなりません。苦しみ、喜びなどは、なにも極端に誇張した身振りなどしなくても、十分に表現できるものです。そのような慎みの念をもたらすのは最初の教育ですから、母親たるもの、それを子供たちにしっかり教え込むようにすべきなのです¹⁰⁰。

誇張とおおげさなしぐさが断罪され、内面の感情を表白するに際しても、控えめと自己抑制が推奨されているのである。いかなる誇大表現とも無縁であることが、作法をわきまえた身体のたしなみなのだ。礼儀作法書は、身体の慎みと節度を説くディスクールにはかならない。

顔の表情についても同じことが言える。アイデンティティの一部である顔は、精神が外在化され、可視化された部分と見なされた。ブルジョワの社交生活においては、人はしばしばまず顔と容貌で判断されるのであり、その意味で決定的な意義をもった。みずからの表情を制御することはみずからの内面を制御することであり、みずからの存在そのものをコントロールすることにほかならなかったのである。スタッフ夫人は述べる。顔がわれわれの感情や想いを表してしまうのはやむをえないが、礼節の観点から見れば、怒り、軽蔑、不機嫌といった感情はできるだけ抑えたほうがいい。それに対して、寛大で鷹揚な気持ちは表情に出しても構わない、と。またトラマール伯爵夫人の『社交の慣習』（1900）は、さらに美容への配慮を論拠にして節度ある感情表現を説く。女性が怒りや嫌悪の情に駆られて洗面をつくるのは、他人が見て不愉快なばかりでなく、女性自身の皺をふやし、顔を老化させる元凶である！微笑こそ女性の顔にふさわしい、と。

ほほえみは、当然のことながら優しくあるべきだし、顔は、ひとが感じる好意と寛大さにあふれた感情だけを示すべきです。時の経過が顔のうえに早急にその痕跡を残すのを望まないのであれば、好意と寛大さにあふれた表情こそ、容貌に表れることがゆるされた唯一の表情でしょう¹⁰¹。

19-20世紀のブルジョワ文化の風土において、女性の身体は抑制され、コントロールされなければならない。礼儀作法書の言説は欲望や欲求の中核としての身体を隠蔽し、身体の動物性あるいは暴力性を中和しようとする。罪と過ちの場である女性の身体をいわば飼い馴らすことによって、その潜在的な脅威をあらかじめ回避しようとしたのである。

見られる身体——文学における女の表象

女性の身体とジェンダーの問題を文化史的に考察するための第三の言説は、文学である。

19世紀フランスの小説においては、女性の身体、表情、身ぶり、衣裳などが詳細に描かれ、語られる。いくら図式的に言うならば、17、18世紀の作家であれば「彼女は美しい」と書くが、19世紀の小説家は「彼女は美しい」とは書かずに、その女の容貌、髪や目の色、肌、肩や胸やウエストの輪郭、手や指をこまかに描写する。その時、女は誰かによって見つめられることになり、見つめる者は多くの場合、男である。近代小説においては、「見られる女」と「見る男」という図式が支配的なのである。そして女性たちを見られる身体、欲望される身体として提示するために、小説はさまざまな物語装置や場面を配置し、女性そのものをスペクタクルに仕立て上げようとした。窓やバルコニーなどの私的空間、舞踏会や夜会などの出来事、劇場やオペラ座といった公的場所などが、そのために用いられた装置である。ついでに付言するならば、このような空間は同時代の絵画においても女性を表象するための格好の舞台になっている。そのことを納得するには、印象派のいくつかの作品を想起するだけで十分であろう。

女性たちのなかでも、とりわけ他者の視線にさらされやすい者がいる。女優は人々から見られることが仕事であり、娼婦は男たちから値踏みされ、欲望の視線を向けられ、情欲をそそるよう運命づけられている。そして19世紀において、女優と娼婦の境界線はしばしば曖昧だった。劇場の世界と売春の世界はときに区別がつかない。舞台に立つ役者であり、裕福な男たちに囲われる高級娼婦であり、肉体をさらすことによって男を誘惑し、破滅させる宿命の女（ファム・ファタール）。それらの相貌をすべて兼ねそなえているのが、エミール・ゾラ作『ナナ』（1880）のヒロインにほかならない。この作品は、ナナがあるオペレッタのなかで金髪のヴィーナスに扮してヴァリエテ座の舞台に登場する場面から始まるのだが、歌の下手な彼女が観衆の目を引くのは、もっぱらその肉体的な魅力によってである。

戦慄が観客席をゆすぶった。ナナは裸だったのだ。自分の肉体の全能を確信し、不敵な落ち着きをたたえて、ナナは裸だったのだ。身を包むものとは、一枚の薄絹ばかり。丸みのある肩、槍のように堅くぴんとつながったばら色の突起のある豊かな乳房、肉感的にゆれ動く大きな腰、あぶらののった金褐色の太腿など、ナナの全身は、水沫のように白い薄物の下から、すけて見えたり、あら

わに現れたりしていた。身をおおうものとはただ髪の毛しか持たぬ、波間から生まれでるヴィーナスであった（中略）。突如、この無邪気な娘のなかに女が立ち上がって、女性の無鉄砲さをさらけ出し、欲情の未知の世界をあばいて男性を悩殺したのだった。ナナは絶えず微笑を浮かべていたが、それは男殺しの鋭い微笑であった¹²¹。

まだ15歳を過ぎたばかりのナナのうちには、すでに熟れた女の肢体が現れている。わずかに薄布を一枚まとっただけで、豊満な肉体を惜しげもなくさらす彼女を前にして、観衆は一瞬のあいだ沈黙し、息をのむ。男たちの欲望が掻き立てられずにはいない。そしてナナの身体は、すでに男たちを破滅の淵へと誘いこむ兆しを漂わせている。ナナの顔に「男殺しの鋭い微笑」を見てとるのは、男の観客の肥大した妄想にすぎないだろうが、舞台の女優と観客のあいだに展開する視線と欲望のドラマを露呈させるこのシーンは、見る男／見られる女というジェンダーの構図をあざやかに示しているのである。

見つめる女の運命

とはいえ、文学のなかに「見られる女」しか登場しないというわけではない。男に見つめられる女が、男を見つめる女に変貌することもある。それは、身体を伸立ちとした視線の力学が大きく転換することを意味するだろう。その時いったい何が起こるのだろうか。フロベール作『ボヴァリー夫人』（1856）にそくしてこの点を論じてみよう。

ノルマンディー地方の豊かな農家に生まれ、田舎医者と結婚したエンマが、夫シャルルの凡庸さと田舎暮らしの単調さに倦み、ロマン主義的な夢を追求しながら不義の恋と浪費生活に耽ったすえ、みずからの生涯を清算するために砒素を仰ぐというこのリアリズム文学の傑作は、女の身体をめぐる物語として読み解くことができる。先に確認したジェンダー力学に従うかのように、最初のうちエンマは彼女が接触する男たちによって見つめられる存在である。シャルルがエンマと初めて出会う時、彼はエンマの爪がとても白いこと、それに反して手がそれほど美しくないこと、そして瞳が魅力的なことに注意を引かれる。そのきっかけとなるのは、針仕事をする彼女がときどき針を指に刺し、その指を吸うというしぐさである。

シャルルは彼女の爪の白さに驚いた。きらきら光って先が細く、ディエップの象牙細工よりもきれいに磨きがかかって、先尖りに切ってあった。しかし手は美しくなかった。白さが足りないようだし、関節がすこし骨張っていた。それに長すぎて、輪郭に柔らかみがなかった。彼女の美しいところは眼であった。茶色のくせに睫毛のせいで黒く見えた。あどけなく大胆に、ぐっと見すえるような眼つきであった¹²²。

あらためて指摘するまでもなく、ここでは男のまなざしが女の身体を捉える。女のほうは、自分が見つめられていることに気づいてさえないようだ。視線の力学はまったく一方的である。その後二人は結婚し、やがてエンマにはロドルフという愛人ができるが、そこでもやはりエンマは男に見られ、欲望される対象であり続ける。

ロドルフに棄てられた後、悦楽と官能に目覚めたエンマはレオンという青年と不倫関係を結ぶ。エンマが見られる女から見る女へと変貌するのは、まさにこの時である。ホテルまで会いにやって来たレオンの姿を目にして、彼女は次のような判断を下す。

男がこれほど美しく見えたことはかつてなかった。得もいえない純真さが彼の態度から感ぜられる。彼は反り返った細長い睫毛を伏せていた。肌のなめらかな彼の頬は彼女の肉体を獲ようとする欲望のために赤らんだ——と彼女は思った。そしてエンマはその頬へ唇を持ってゆかずにいられない欲望を感じた¹⁴⁾。

今やエンマは男を見つめる女になった。レオンにそなわる無邪気さの混じった美しさを愛おしく思い、長い睫毛に魅了される。しかも見るだけでは満足できず、その頬に接吻したいという欲動に駆られ、その欲動をみずからに隠そうとしない。この一節は、シャルルがエンマと初めて出会った時の叙述に呼応するのだが、しかし男と女の立場が完全に逆転していることが分かる。かつてはシャルルの視線がエンマの身体を表層をさまよったが、今ではエンマがレオンの肉体に激しい欲望を覚えるのだ。そしてついに、「エンマがレオンの情婦というよりも、レオンがエンマの囲い者のようであった」という一文が作家によって記される。『ボヴァリー夫人』の草稿段階では、この箇所でもっと明示的な文章が書かれていた。「エンマはあらゆる感覚をつうじて彼を占有し、呪縛していた。レオンは彼女のもの、彼女の男、彼女の所有物にほかならなかった」。欲望する女と欲望される男、所有する主体としての女と所有される客体としての男。ここでは、欲望と性をめぐる同時代のジェンダーの規範が転倒している。女性の性的欲望をたくみに隠蔽し、それを認めまいとしていた19世紀の社会道徳にとって、それはあってはならない、このうえもなくスキャンダラスな挑発だったはずだ。

フロベールの小説は「公序良俗に反する」という罪状のもとに起訴され、裁判沙汰になった。しかしそれは、人妻の不倫を物語のテーマにしたためばかりではない。不倫は確かに好ましくない行為ではあろうが、当時の小説や演劇においてきわめてポピュラーな主題にすぎず、それだけで法的に断罪されるわけではなかった。『ボヴァリー夫人』が官憲の忌諱に触れたのは、エンマが見られる女から見る女へと大胆に変貌し、欲望の客体からその主体になってしまったからだ。しかもそれが、特殊な状況に置かれた女の逸脱した行為ではなく、平凡ながら幸福な人生を約束されていたかに思われた女が、みずからの感情に忠実に生きてがゆえにたどる、ほとんど不可避的な運命であるかのように物語られたからである。第二帝政期

の司法権力はそこに、倫理と秩序にたいする脅威を見てとったのであろう。罪深い愛の物語であっても、女が見られる客体であるかぎり問題はない。しかし見つめる主体に変貌した時、つまり身体をめぐる当時のジェンダーの掟を破った時、ヒロインは社会的な制裁を受けなければならなかった。

結語

以上、医学、礼儀作法書、文学という三つの異なる言説を取りあげて、近代フランスにおける女の身体表象を分析し、それをつうじてジェンダーの問題を考察してみた。医学書や医学事典は、科学の名において男女の社会的差異を自然なことであるかのように記述し、性役割の分担を正当化しようとした。礼儀作法書は男性よりも女性に厳しい規範を課し、女性の身体を注意深くコントロールしようとした。そこでは社交と礼節の要請によって、ジェンダーが内面化される。そして文学は、ほとんど常に女を見られる客体という枠組みのなかに閉じこめ、その枠組みから抜け出そうとしたエンマ・ボヴァリーのような女性を罰した。身体の表象とは自然と文化、現実と想像力が会おう空間である。医学書、礼儀作法書、小説と言説の種類は違うものの、そこでは共通して、ジェンダーの非対称性が刷り込まれているのである。

注

- 1) トマス・ラカー『セックスの発明』、高井宏子・細谷博訳、1998年、工作舎。原著は、Thomas Laqueur, *Making Sex. Body and Gender from the Greeks to Freud*, Harvard University Press, 1990.
- 2) 荻野美穂「女の解剖学——近代的身体の成立」(『制度としての〈女〉——性・産・家族の比較社会史』、1990年、平凡社所収)
- 3) *Dictionnaire des sciences médicales*, Panckoucke, t.14, 1815, 〈Femme〉, p.540.
- 4) *Ibid.*, p.547.
- 5) *Ibid.*, p.546.
- 6) *Ibid.*, p.547.
- 7) Jules Michelet, *L'Amour*, dans *Oeuvres complètes*, Flammarion, t.18., 1985, p.172. 邦訳はミシュレ『愛』、森井真訳、1981年、中公文庫。
- 8) Odile Arnold, *Le Corps et l'âme. La vie des religieuses au XIX^e siècle*, Seuil, 1984.
- 9) Baronne Staffe, *Usages du monde. Règles du savoir-vivre dans la société moderne*, Havard, 1889.
- 10) *Ibid.*, p.123.
- 11) Comtesse de Tramar, *Usages mondains, guide du savoir-vivre moderne dans toutes les circonstances de la vie*, Havard, 1900, p.125.
- 12) Emile Zola, *Nana*, dans *Les Rougon-Macquart*, Gallimard, 〈Pléiade〉, t.2., 1983, p.1118.
- 13) Gustave Flaubert, *Madame Bovary*, Garnier, 1984, p.16. 訳文は伊吹武彦訳(筑摩書房)による。
- 14) *Ibid.*, p.242.

参照文献（注であげたものを除く）

- Borie, J. 1973. *Le Tyran timide. Le naturalisme de la femme au XIX^e siècle*. Paris: Klincksieck.
- 江原由美子. 1995. 『装置としての性支配』東京：勁草書房
- Elias, N. 1969. *Über den Prozeß der Zivilisation*. Bern und München: Francke Verlag. (ノルベルト・エリアス. 『文明化の過程』全2巻. 中村元保ほか訳. 1977-78年. 東京：法政大学出版局).
- Knibiehler, Y. 1983. *La Femme et les médecins*. Paris: Hachette.
- 工藤庸子. 1998. 『恋愛小説のレトリック』. 東京：東京大学出版会.
- Lacroix, M. 1990. *De la politesse, essai sur la littérature du savoir-vivre*. Paris: Julliard.
- Léonard, J. 1978. *La France médicale: médecins et malades au XIX^e siècle*. Paris: Gallimard/Julliard.
- 小倉孝誠. 1999. 『〈女らしさ〉はどう作られたのか』京都：法藏館.
- Perrot, Ph. 1991. *Le Travail des apparences. Le corps féminin XVIII^e-XIX^e siècle*. Paris: Seuil.
- Scott, J.W. 1988. *Gender and the Politics of History*. New York: Columbia University Press. (ジョーン・W・スコット. 『ジェンダーと歴史学』. 萩野美穂訳. 1992年. 東京：平凡社).
- 上野千鶴子. 1991. 『性愛論』. 東京：河出書房新社.